

二百年にして可能となったこと——あとがきに代えて

劉 建輝

一九世紀初頭にはじまる東西両文明の本格的な遭遇について、従来、よく「西洋の衝撃」、「西学東漸」と表現されている。しかし、そこからスタートしたわれわれの二百年間の歴史を振り返れば、その中身はけっしてそんな表現で示せるほど生ぬるいものではない。それは、自己完結的で、有史以来あえて問題視することもない自らの世界認識や思考様式を強制的に明確し、自覚させたのみならず、またその「衝撃」を受容すべく、あらゆる知的所産を組み立て直し、あらたに現れた認識と思考の枠組みに服従することにほかならなかった。つまりわれわれは、小にして日々自らの思索行為を可能にする個々の言葉＝概念の指示する対象、大にしてそれぞれの存在を一人格として成立させる教養体系の持つ中身、そのすべてが改造、変換させられていた。まさしく徹底した知的換骨奪胎である。

ところが、いったんこのあらたな認識・思想的布置に入ったわれわれは、往々にして自らの境遇に無自覚となり、あたかもこの知的空間を自明的に持ち合わせ、完全にその成立過程の歴史性を無視した形で長らく認識、思索営為を続けてきた。これは、たとえばかつて「近代の超克」を叫びながらも、結局は近代知のパラダイムのもとでしかそれを実践できなかった先達の痛々しい姿を見ても納得できよう。二〇世紀後半には、いわゆるポスト・モダンの嵐（これも欧米から吹き出したものだが）が一時喧騒を極め、またしもわれわれの知的基盤を大きく揺さぶったが、しかしそれはその出自に起因する種々の制限により、やはりわれわれの真の「自覚」をもたらすところまでには至らなかった。

その意味で、二一世紀に入り、日本にリードされながら、東アジア全体がようやく二百年を費やしてその西洋受容＝「近代化」の初段階を完成し、いよいよ次のステップに進もうとする今、一度この間の歴史を振り返り、そのすでに自明的となったもろもろの概念、ないしは知的システムを洗い直し、自らの知的境遇を再認識することで、今日の諸課題に見合う認識、思索営為を模索するのがきわめて大事な作業と言えよう。

しかし、こうは言っても、筆者はけっしてこれまで各学問分野において多くの先達によって進められてきた数々の「近代」を検証する研究成果を無視し、ましてや否定するつもりは毛頭ない。われわれの模索がまさしくそうした各分野の業績を継承し、その延長線上で進めなければならないことは言うまでもない。ただあえて従来の関連する諸作業の「欠点」を指摘するならば、それはおおむね次の二点に収斂されよう。

一つは、近代東アジアの歴史は、その地域的在来秩序の崩壊と新たな秩序の形成にともなう複雑な「地殻」変動により、当初から一貫して互いに交錯、浸透、往還する相互依存的な関係にある。にもかかわらず、一九世紀なかば以降、ことに第二次世界大戦後ますます強固となったナショナル史観や学科概念等により、往々にして三国が没交渉的にそれぞれの自国史を構築し、いわゆる「近代」への検証もほとんど国別に行われてきた。もう一つは、こうした国別に加えて、それらの作業は各国においてさらにそれぞれの学問分野、つまり思想史、文化史、言語史等の専門領域の範囲内でこれもほとんど没交渉的に進められてきた。しかし、こと概念の例で言うと、およそ一九世紀初頭に来華したプロテスタント宣教師によって翻訳され、その後明治日本の知識人たちの手によって加工されて東アジア全地域に広まっていったその生成の歴史を挙げるまでもなく、個々の内実に関する本質的な追究はまさに思想史、文化史、言語史三分野からのアプローチが必要であり、それを横断的に進めてはじめて究明が可能となるのである。

幸いなことに、昨今、従来のこうした各分野間の没干渉の弊害に気付き、多くの研究者が自らの所属領域を飛び出し、いわば学際的にそれぞれの研究課題に取り込み、また共同研究等の形でより総合的に

その諸課題を把握し、考察しようとする機運が年々高まってきている。加えて、近年、韓国や中国、とりわけ後者における学術的状況の改善と研究水準の向上に伴い、かつて相互の交流、交通を阻んできた「壁」も消えつつあるなか、三国の学者がようやくこの二百年間にわたるさまざまな歴史的事象について、同じ土台に立ちながら多角かつ重層的に議論、探求することができるようになってきた。

まさしくこうした大きな時代的状況の変動を受け、国際日本文化研究センターにおいて、ここ数年、いわゆる概念、または知的システムの再編成を目指すべく、ほぼ同一テーマのもとで、共同研究会、国際シンポジウム等を以下の如く主催、共催してきた。

共同研究「出版と学芸ジャンルの編成と再編成——近世から近現代へ」（代表鈴木貞美・平成一五年度～一八年度）

共同研究「近代東アジアにおける二字熟語概念の成立に関する総合的研究」（代表馮天瑜・平成一六年度）

共同研究「近代東アジアにおける知的空間の形成——日中学術概念史の比較的研究」（代表孫江・平成一八年度）

共同研究「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」（代表鈴木貞美・平成一九年度～二一年度）

国際研究集会「東アジアにおける近代諸概念の成立」（平成一七年八月二六日～二九日）

国際シンポジウム「東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的發展のために」（平成一九年三月二三日～二五日）

国際シンポジウム「歴史文化概念の再検討（歴史文化語義学）」（武漢大学・日文研共催・二〇〇六年一月一六日～一八日）

国際シンポジウム「東アジアにおける近代諸概念の生成と展開」（北京大学・日文研共催・二〇〇七年一月一六日～一八日）

そして、本報告書も、一昨年、平成二〇年十一月一七日～二〇日に日文研において行われた国際研究集会「東アジア近代における概念と知の再編成」で発表された原稿をもとに編集したものである。国際研究集会には中国、日本、韓国から四一名の研究者が参加し、内二六名が研究発表を行ったが、論文参加も加え、本報告書には、計二七本を収録した。これらの成果は前記の共同研究、国際シンポジウム等で得た知見を継承、発展させたものが多く、また今後展開する当課題の中間報告的な性格をあわせて有しているものと位置づけられる。

一読して、お分かり頂けると思うが、国際研究集会、ならびに本報告書は、「セッションⅠ 伝統的『知』と『概念』の連続と継承」、「セッションⅡ 幕末・清末における『知』の再編と創成」、「セッションⅢ 近代諸概念の生成と展開」、「セッションⅣ 二〇世紀における東アジア的『知』と概念の新展開」と、おおむね歴史の展開順に構成し、また分野的にも思想史、文化史、言語史の三領域からそれぞれの課題、テーマにアプローチして頂いた。ここには、それぞれの「国籍」と研究領域を背負いながらも、それらをあえて克服して、他文化、他領域にまで踏み込んで個々の概念や、あるいはそれをめぐる諸事象を探求する発表者、執筆者の方々の真摯な姿が確認できよう。

むろん、こうした目論見がどこまで達成したかは、あくまで個々の読者をご覧になった上、ご判断なさるべきで、編者としてここで云々するものではない。ただ、一部にまだゴコチナサが残っているとはいえ、従来の文化帰属、専門分野を乗り越え、比較的総合的に多数の近代概念、ないしはその背後の近代知システムの変遷を整理、解明できたことは、きっとわれわれの一連の模索と努力が間違っていないことを証明してくれるだろう。

最後に、編者の一人として、発表、執筆、また論文参加の諸先生方に深く感謝の意を表したい。紅葉の染まりかかった京都で素晴らしい一時を共に過ごしたことを今もたいへん懐かしく思い出される。むろん、本報告書を編集する過程ですべてを引き受けた担当の堀内智氏にも感謝したい。そのご努力なしには、とてもこの報告書が完成できなかっただろう。心よりお礼を申し上げたいと思う。